

第2回「都立文化施設のあり方検討会」議事概要

1. 日 時：平成18年9月13日（水）午前10時から12時まで
2. 場 所：東京都庁第一本庁舎33階北側 特別会議室N6
3. 出席者：福原委員（座長）
草加委員
高野委員
原委員
福地委員
浅津委員（吉住委員代理）
今村委員
杉谷委員
真室東京都美術館館長
4. 次 第
意見交換「テーマ：東京都美術館の現状と課題・役割・機能」
5. 主な発言
 - 前回の委員会で若手作家支援はどうだろうという提案があった。東京都の文化振興指針に沿って新人アーティスト支援をどのような方針で推進するかを定める必要がある。東京都現代美術館では新人アーティスト支援としてMOTアニュアルを展開している。この活動を拡大し、提案のあった新進作家事業について東京都現代美術館などが積極的に取り組んでいくべきではないかと考えている。その際には、都立の他の美術館やワンダーサイトとの連携を考える必要がある。
 - 本日の資料、前回の議論から東京都美術館は大変多くの集客を得ている美術館といえる。また、公募展応募者が多数訪れている、アーティストが集まっている美術館ともいえる。公募団体間の交流がもっとあれば、新たな動きが始まるのではないか。そのためには、東京都美術館が積極的に関わる必要がある。
 - 公募棟1棟分を他の活動に転用しても一定の集客が確保できるのであれば、このスペースを新規事業に活用していくことがよいのではないか。
 - 上野の各文化芸術施設は集客力がある。上野全体に文化を求めて集まってくる人の数は大変多く、その層は無視できない。
 - エイブル・アート系の催し物などをうまく使って、新しい活動につなげていく可能性もあるのではないか。
 - 東京都美術館は、他の美術館とは性格が異なり、純然たる美術館と区別されるべきだろう。美術館らしい事業も少し実施するが、展覧会などのアート活動を幅広く展開するクレストハーレに近いのではないか。
 - 旧東京都美術館開館当時は、西洋の印象派などの優れた文化を日本に導入したいとの動きから、公募展や洋画の同好会グループの活動が盛んであった。このような時代では公募展に展示室を貸すことに意義があった。当時と現在では求められる役割が違う。現在の社会状況を踏まえて、公募展についてやるべきことを考え直すべきだろう。しかし、美術館にとって安定収入があることは重要なので、アートに関わる活動を展開しつつ、経営面の視点からも公募展を続けていけばよい。
 - 芸術鑑賞をする環境、展示方法が相応しくない公募展も散見されるので、望ましい展示作品数や展示の質、入場者数を考えなければならない。
 - 小学生、中学生、高校生、大学生、それぞれのレベルに応じて芸術を情報発信して、本物に触れる機会を与えていくべきだろう。豊島区で実施している「新池袋モンパル

ナス西口まちかど回遊美術館」のような芸術活動の底辺となる活動が東京都全体で行われ、最終的に東京都美術館につながっていくことが望ましい。

- 美術の発信の基となる施設が上野に集積している利点を活かした各施設との連携が必要だろう。
- 次代を担う子ども達に焦点を当てることもひとつの案である。
- 来館者に高齢の人が多いため、来場者の動線を踏まえて建物の見直しが必要と思う。
- 東京都美術館は工芸・書にとっては作品発表の場となっていて、この分野の新人が育つ場として機能している。
- もっと大きな視点で、上野の公園全体の整備との関係から東京都美術館の改修を考えるようなレベルもある。文化施設はまちづくりにも密接な関係があり、東京都美術館に新しい機能を加えることで、庶民と芸術が一体化しているという上野の持つ魅力が強化される可能性もある。また、美術館とコミュニティとの関係が現状では希薄なため、美術館がどのようにコミュニティに係わっていくのかを考える必要がある。
- 東京都美術館は何かの分野に特化していく美術館ではないため、明解なプログラムミックスが必要だと思う。